

造り葬った悲劇は今なお忘れられないとボロボロと涙を流して話すのである。

生きている夫婦は死んではならない。愛児の遺髪をふところにして、満州人や中国軍隊の人夫になつて賃かせぎ、妻は花売りなど苦勞苦痛、食べられるものは何でも食べて生きた。

ただ、もつとも困つたことは近氏は元警護隊員であるとは分かれれば逮捕されるので、一方ならぬ心理的に大きな障害だつた。

幸いに二十一年七月引揚げ命令が発表になつたので、苦心慘憺してコロ島から乗船し生きかえつた心地で郷土にたどり着き、感激でただ泣くばかりだつた。昭和二十三年、幸いに新潟県警察官に採用となり定年退官となつた。

長期にわたる勤務ぶりが良かったので、第二の職場として県自動車練習所職員の委嘱をうけて八年間も勤務していた。

(松引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

引揚げ体験記

岐阜県 則 竹 次 郎

志望、そして異郷への旅立ち

小学校に入学したころから支那事変、大東亞戦争と戦いの連続で専ら戦時教育だつた。

高等科二年の卒業式を前にして満蒙開拓青少年義勇軍を志望、昭和十九年三月十五日、岐阜県送出第七次田中中隊（田中鈴夫中隊長）に入隊、田中中隊は河和田分訓練所に入所し、岐阜第四十四中隊を編成し、中隊長以下二百余人が昼夜を分かたぬ基礎訓練に励んだ。翌月に今年度義勇軍入隊者一万余人を対象に入學試験が実施され、幸運にも二百人定員に合格して満蒙開拓青少年義勇軍基幹学校（加藤完治訓練所長兼学校長）に入校した。

この学校の前身は義勇軍準幹部養成所で、昭和十八年度から基幹学校と改名された。

多忙な学校長が寸暇を割いて農事はもちろんのこと、学科、武道とみずから教育に携わり幹部教育を貫いた。九月になって校長の命令により百人がハルビン市郊外の満州開拓青年義勇隊嚮導訓練所（陸軍少将井上覚次所長）に編入された。

現地各訓練所から募集した三十余人と基幹学校から来た百人で第一中隊（三木原勝義中隊長）を編成した。嚮導訓練所は満州国立大学開拓指導員訓練所の予科だった。嚮訓では旧制中学校教育と義勇隊教育とが一体となっていて、将来の義勇隊指導員養成に力を入れていた。

冬期は零下四〇度を超す厳寒の中で学科と軍事教練、夏期は灼熱の太陽の下での農事訓練を先輩訓練生と共にし、尋問を通じて厳しい訓練の連続だった。

初めて大陸に鋤を振る播種し、穀類・野菜ともに順調に成育し、収穫も近い八月、敗戦の民となった。まゝ一年の訓練の果てに敗戦の憂き目に遭遇し、志半ばで訓練は中止となった。

敗戦後の嚮導訓練所

敗戦になって二十日余りの間に、東北のソ満国境方面から着のみのままの同胞避難民が続々と訓練所に流れついて、宿舎は収容能力をはるかに超えて膨れあがった。婦女子、老人ばかりで病人、けが人が随分いるようだ。

食糧、被服の支給や病人の看護と毎日が忙しい。暗くなれば付近の原住民が銃を持って襲ってくる。訓練所回りのコーリヤン畑は、彼らが隠れて攻めてくるのにかっこうな地物、時々上がるのろしも我々に恐怖を与える。

実弾を与えられての警備につく。訓練生時代と違って歩哨交代もない。歩哨線に沿って銃を構え目を光らせる日々が続いた。

収穫間近のコーリヤン畑数十町歩を昼間のうちになぎ倒した。努力に努力をかさね立派に育った圃場が無残な姿に変わり涙が出る。収容避難民の今の安全確保のため、今冬の糧秣を捨てざるを得なかった。

地平の果てに関東軍の施設が数十棟建てられていた。軍隊のいなくなった倉庫は原住民にとって棚からボタ

餅の宝の山だ。メリケン粉（小麦粉）の白い大きな袋を山積みにした大車^だが、西へ東へと列をなして走る。

警備体制の有無は不明だが所詮^{しよせん}多勢^{たせい}に無勢^{むせい}、しかし、略奪した武器を武器にした集団には手の打ちようがなかったのかもしれない。

遠くで眺める我々の目にはさながら餌を巢^ねに運ぶ蟻の行列に見えた。ここにはもう我々邦人を守ってくれる軍隊の存在がなかった。置き去りをくったのか見捨てられたのか。

国策の名のもとに多くの開拓団と十万にも及ぶ我々満州開拓青年義勇隊員は国の保護がなくなった。我々には北方鎮護の任務をも課しながら、その時々々の政策の変更とは言え残された同胞を見捨てるとは。

原住民の夜襲^{やせう}が下火になって安堵^{あんど}したころ、ソ連兵が進駐してきた。自動小銃を肩からぶら下げた進駐軍は原住民より始末が悪い。

間もなくソ連軍によって武装解除の命令が下った。嚮導訓練所最後の衛兵だった。昭和十五年訓練所開放以来先輩から連綿と引き継がれた兵器だったが。

勤務を下番し、ソ連軍の軍用車に衛兵自らが積み込む悔しさは、若い衛兵にとつても、とてもつらいものだった。兵器は「陛下からお預かりしたもの、大切に取り扱い扱え」と教育されたものだ。

陛下にお返しすべき兵器をソ連軍に渡すとは……。我々の責任で武装解除されるわけではないが悲しかった。悔しさもあつて積み込む前に銃身を少し湾曲させた。

ソ連兵の横行は略奪に始まってついに婦女子にまで手を出すようになった。

人前もはばからずに凌辱するさまは、まさに地獄の鬼もさぞやと思われる光景だった。

女性が自ら黒髪を切り捨てたのは、このころからだ。髪を落とし軍服に着替えてもやはり女性の体形は隠せない。ソ連兵の非道は後を絶たなかった。

報われなかった牡丹江への苦難の道

敗戦後およそ二十日ほどして、ウラジオストック經由で日本に帰国できる知らせがあった。

リュックに食料品、衣類などをいっぱい詰めこむ。

激戦地の東満方面を通過しての帰国のこと、途中にどんな障害があるかもしれない。なかでも食料品は持てるだけ持った。

札拜場に整列し出発の命令を待つ。ソ連の兵士が肩から銃を下げて寄ってきた。「何事か」とドキンとする。命の綱の大事な荷物を取り上げようとしているのか、何ものにも代え難い大事な荷物だが命はもつと大事だ。

荷物を羽交い締めにして彼の顔を見た。言葉は分からないが身振り手振りで、「このリュックとお前のリュックと取り替えろ」と言うことらしい。破損した彼の物より自分のリュックの方が数段上だが、この際は彼の要求に従うほうが得策と思って中味を全部移し替えて渡した。渡満以来大事にしてきたリュックを取り上げられた。

北満のハルピンは秋真つただ中、その日は昭和二十一年九月六日だった。

思い起こせば一年前、昭和十九年九月二十一日、嚮導訓練所の訓練生として、希望に胸を膨らませ降り立

った新香坊駅である。

過去の栄光を剥奪はくたつされ避難民として駅頭に立とうとは断腸の思いである。

浜綏線新香坊駅から無蓋車に乗る。帰国のためならぜいたくは言えないが貨車とは驚いた。それも周囲に囲いのないお皿のような物である。荷物を椅子代わりにして腰を下ろした。

外回りに我々訓練生を配し、中ほどの安全な席は老人や病人の席にした。周囲の我々は隣同志お互いにゲートルで体を固定した。これは眠っても振り落とされないための対策である。

列車は発車した。だれが歌い始めたか「ラバウル小唄」の替え歌が聞こえてきた。「トさらばハルピンよまたくるまでは……」と。

再度訪れることを知ってか知らずか……我々を乗せた列車は東に向かっているはずだが、地図がないので、頭の片隅に残っている知識だけでどこをどう走っているのか見当もつかん。

列車が止まった。一斉に飛び降りて用をたし、次に

いつ、どこで止まるのやら分からない。列車の周りに満人の物売りが寄ってくる。まんとう、餅、トウモロコシなどなど籠に入れて大声で客に呼びかけている。随分と高い値で売っているようだ。

一夜明けて列車は次第に木々の多い森林地帯にさしかかっていた。太い木がたくさん生えている原生林か……白樺が多いようだ。更に東進し、全くの山の中である。我が故郷の比ではない。満州にもこんな山深い地域があったのかと驚く。

列車が止まった。小休止ではないらしい。この先は激戦で鉄道が破壊され線路がないと聞かされた。小雨が降る山中で降ろされた。

横道河子（ハルビンからおよそ二百五十キロ）と聞かされた。駅周辺の山に挟まれた広場には、旧日本軍の大砲や戦車がたくさん集められていた。下車した集団は戦利品の間を黙々と歩く。

ソ連兵が銃を構えて立っている。背筋が寒くなる。ここからは歩いて進むことになった。前後と要所にソ連兵が銃を肩に一緒に歩いている。ウラジオストク

ク経由で帰国させるはずだが、ここから目的地まで歩くのどうか。どのくらいの距離で何日ぐらいかかるのか、我々には知らされていない。ただ黙々と歩くのみリュックのひもが肩にグツと食い込んで痛い。畑の間や丘陵を曲がったり上ったり長蛇の列が動く。

歩いた昼間は雨に災いされたことはなかったが、野宿の夜は決まって雨だった。丘陵のかっこうな傾斜を枕代わりの野宿、一枚の毛布が夜具のすべて、降り始めれば雨具に変身。

夜明けとともに朝飯の準備にかかる。付近を歩き回り薪を探しに三、四人が一つのグループになって食事をとるようにしていた。

三日目になった。薪を探したが全くなかった。困り抜いた結果は鉛筆だった。鉛筆で御飯を炊いて食べたのは、後にも先にも更に今日に及ぶも、たったの一回だけだ。鉛筆で炊いた御飯が思い出としては残っていないが美味だったかどうかの記憶は残っていない。苦しく懐かしい思い出である。

四日目の朝、こんな光景に遭遇した。食事の準備で

薪集めや、水くみに出かけた。なだらかな坂道を下つて幅二メートルほどの小川にたどりついた。夏草をかき分けて水をくもうと思わずハツとした。戦死されたらう日本兵の遺体が沈んでいた。腐乱が始まっているようだ。合掌して上流へ足を運んだ。

川沿いに夏草の繁みを避けてう回した。また悲惨な情景が目に入った。そこには下士官を含め十人ほどの軍人が自決されたらしく、ほぼ半円をかくように一カ所で最期を遂げられていた。痛ましい状況を目の当たりにしてここが激戦地であったことを改めて認識した。夏の盛りの戦争で多数の兵馬が倒れたらしく、行く手の野や山で何度も腐乱した遺体の悪臭に襲われた。

また数えきれないほどの軍用トラックや戦車が無残な残骸を路傍に残していた。あるいは中に軍人さんの遺体があったかもしれない。

夜中にたつぷり雨を含んだ毛布を背中にかけて乾かしながらの行軍、その水分は重みとなり苦痛だ。歩いて四日目に、海林（横道河子からおよそ百キロ）につ

いた。

丸太に錆びたトタン板を打ちつけただけの粗末な三角屋根の急造の収容所だった。それでも野山で草を枕に寝たことを思えばまさに金殿玉楼に近い存在だ。

ここ数日の行軍で汗と雨とほこりで体が汚れ、自分で悪臭を感じるほどだ。当然ながら異変が起きていた。おびただしい数の虱だ。一匹一匹つぶすしか手がない。海林は虱との戦いだつた。

久しぶりに拭いた体は気持ちいい。水の冷たさも快感のうちシャツやパンツも大地に広げて干した。

現地人が物売りに来る。金を持たない我々は乏しい品物を物に交換して野菜を求めた。

このころでは仲間内でも他人の物を盗んで、売る輩が増えて物騒でならない。グループで監視体制をとり自衛した。ここでも燃料には困り、数人で旧軍隊の倉庫へ行き、板火薬を盗んできては燃料にした。

九月二十三日再び牡丹江へ移動することになった。

また長蛇の列が続く。

朝出掛けて夕方までには着くことができた。牡丹江

は満州の日本だと聞いて、憧れの地だった。気候、風土が祖国とよく似ているということだったが、こんな形で訪れようとは。

今度の収容所は海林より数段上等だ。ガラス窓もある。大工さんの養成所だったらしく、屋根裏のそれぞれの箇所に梁・桁・棟と書いた紙が貼ってあった。

だれかが空襲で焼けた跡地から、味噌を見つけてきた。少し焦げているが大丈夫らしい。久しぶりで味噌汁を味わった。当時の状況下でダシがあるはずもなく、ただ野菜を入れただけの味噌汁だったがこの味のよかったこと。

黒パン受領のため牡丹江駅前に連れて行かれた。市街地は空襲の爪痕が生々しく残っていた。爆弾が落ちた跡だろう。道路のど真ん中に直径十数メートルの大きな穴が幾つも空いていた。

表に第五軍管区司令部と書かれた鉄筋コンクリート造りの四階建ての建物があった。爆弾が屋根に命中したらしく、三階あたりまで破壊されていた。

ハルビンを出発して一カ月、次の行動の指示がある

ころだ。冬將軍の到来も近い。

再びハルビン逆送に決まった。折角ここまで連れて来ながら、首をかしげることばかり。それでもハルビンでよかった。少しは慣れているハルビンでよかった。寒い奥地やシベリヤでなくてよかった。

牡丹江駅から汽車に乗りハルビンに向けて走った。十月九日夕刻、新香坊駅に着く。ハルビンはもう秋を過ぎて冬だった。

再び訪れた戦後のハルビン

懐かしい安住の地と思って帰ってきた訓練所は、もう我々を受け入れてくれなかった。自分たちの住む空間はなかった。

とりあえず指導員訓練所に収容された。今後のことについて上の方で協議されたらしく、健康な者をハルビン市街へ派遣することに決まり、地段街の旧桃山小学校に収容された。

満州国時代ハルビン駅前広場に建国記念碑が建てられていた。その記念碑が壊されてソ連軍の記念碑が建造中だった。その使役にかり出された。敵国の記念碑

建造に加担することをいさぎよしとは思わないが、訓練所に残してきた病弱者の薬代と思えば致し方ないが……。

ソ連軍が戦略物資を本国に送るための貨車積みの使役もあつた。その物資は衣服や繊維品が主だつた。役得で虱がいっぱい群がった服と新品を着替えて帰れることだつた。時には必要以上に着膨れて門を出る。歩きにくかつたが売って生活の糧とした。

この冬は去年より暖かいようだ。お陰で凍死は免れたが、まん延する発疹チフスで次々と死者が出た。医者もおらず薬もない。その上に患者の体力がない。また満足な食事もなく栄養、滋養なんでもは全く縁のない世界だつた。遺体は軒下に野積みにされていた。安置と言ふ言葉はとも使えない状態だつた。

そのころだつた。自分も熱が出たらしく、妙に体がだるく床についた。多分虱様のお世話になつて発疹チフスに冒されたようだ。医者は来てくれず薬ももらえなかつた。そのとき、ひどく威勢のいいどこかのアンちゃんが来て、「貴様などはたるんでいるから病氣

になるんだ。俺が気合いを入れてやる」とどこから持ってきたのか、竹刀を振り回し叩いたりして荒療治をした。当然ながら竹刀の洗札を受けた。その治療が功を奏したとは思いたくないが治つた。まずはアンちゃんに感謝するべきか。

使役の仕事がなくなり、健康な者は「居場所を明確にして、住み込みで出稼ぎに出かけよ」と言うことになつた。満語に一抹の不安を抱きながらも自活の第一歩を踏み出した。道外（満人、鮮人などの居住区）は治安も悪く物騒とは聞いていたが、収入が割にいいと言うことで職探しに出掛けた。最初は一人で十八道街の機屋さんに行った。一晚、屋根裏に寝て、翌日「病人だから」と断られた。別に病氣していたわけではないが、栄養失調で体が弱々しく見えたのだろう。

その次は同期の友と二人して、八道街で住み込みの仕事をすることになつた。

夜になつて店の家族が寝静まつたことを見届けて、勝手から「マントウ」を取ってきて食べた。最初は少しのつもりが、次に食べて気がついたら全部食べてい

た。主人に怒られ、家族の非難を浴びて追い出された。

今にして思えば恥ずかしいやら情けないやら、「貧すりゃ鈍する」と言う、難民生活でいつの間にか日本人の誇りを忘れていた。

その次は頭道街の印刷屋、同期和歌山の山西君と二人で勤めた。

石版と活版と二種で、活版印刷の機械は大坂製で、性能は当時かなり高く評価されていた。汽車の切符を作ったり、二、三十ページの教科書も印刷した。時には複写の伝票なども作ったが、紙質の違う紙をそろえるのが難儀だった。

ここの従業員は十人ほどいて半数は全くの文盲で、読み書きがほぼ完全にできる人は二人だけ、印刷工は活字が反対でも横向きでもそのまま製品にしてしまう。お客さんも大したもので気付かず引き取っていった。

石版印刷は石にレットルのデザインを固着させ、いろいろな高品のレットルを印刷していた。仁丹とか、三ツ矢サイダー、森永キャラメルなど、日本の統治時代の商品の容器もたくさんつくった。今にして思えば

特許侵害で裁判沙汰になるところだ。

三色か四色の印刷で、動力は自分と山西君の腕力のみ、印刷が終われば砥石で盤面を磨いて、また新しいデザインを固着させていた。

朝は従業員が起きて来るまでにストーブで部屋を暖め湯を沸かして、一人一人専用の洗面器に適温の湯を準備し、彼らが顔や体を拭いた残り湯を片付ける。はじめな下男扱いだだった。虱も馴れていたが南京虫には悩まされた。初めての経験だった。狭い壁のすき間からはい出してきては我々の血を吸う。

多分これが原因だったと思うが、食われて痒くなつたところを無意識のうちに掻いたらしく、吹き出物が両足にできた。

「こんなものぐらい自然に治るだろう」と放つておいたのが悪かった。どんどん噴火し数を増し足を覆うまでになってしまった。

医者はなし市販の売薬は有るにはあるが、塗っても泡が出ないほどに薄めてあるオキシフルに、象徴されるように薬効は極めて悪い。ガーゼ・包帯なども目を

覆うほど高い。高いが放っておくわけにもいかん。わずかな給料が消えた。山西君も同情して、「街で菓を見かけたから」と度々買ってきてくれた。

時々、傷痕を見ては当時を思い起こす。今は故人となつた山西君に感謝している。

暖かくなつてからは南京虫の襲撃を避けて軒下で寝た。ここでは被害を受けることもなく帰るまで軒下住まいで通した。仕事はつらかつたが飯と寝床が確保されて、凍死は免れた。三食つけて月四百円の待遇で八カ月ほど働いた。時には植字、校正などもするので、主人が重宝に思ったか、時々風呂に連れて行つてくれたり、うまい物を食べに二人を誘つてくれた。

奥様は三十半ばの小柄な美人で纏足^{ヂンソク}でヨチヨチ歩き、給料のほかに小遣いをくれたり、自宅に呼び寄せては御馳走をしてくれた。

昭和二十一年八月、全員集合がかかり主人から饒別などもいいただき工場を後にした。

ちなみに工場の名前は「志成印刷局」だった。

帰国の途につく

今年中に帰国できるかと案じていたが、嬉しい全員集合がかかった。

蓄えの一部を帰国準備の買い物に費やし、少しはさっぱりした物が欲しかった。古着屋を回って上着とズボンを求め、ついでに靴を物色した。割に値打ちな皮靴を売っていたので、思わず手が出て買ってしまった。食わせ物だったことに気付いたのは十日も後のことだった。

いつものように唯一の履物で外に出た。あいにく午後から雨になつた。妙に歩きにくく脱いで見てびっくり、踵^{かかと}の部分がなくなつていた。よくよく見ると踵^{かかと}がボール紙でできていたようだ。呆れるやら馬鹿らしいやら……。

全員集合に近隣に散っていた友が、帰国に胸をはずませて集まつて来た。皆の顔が明るい。数々の苦痛に耐えてこの日を迎えたのだ、この喜びは耐えた者のみが味わえる喜びだ。

馬車に相乗りで訓練所に向かった。まるで凱旋將軍のお国入りの気分だ。胸を張って訓練所に入る。懐か

しい顔、顔、顔、三三五五集まって、互いの健在を祝福し合っていた。

三宅智久君が気付いて来た。互いの健在を祝福する前に石田伯夫君の訃報を知らせに来た。この知らせは寝耳に水だった。

一瞬耳を疑った。石田君は三宅君を含めて岐阜県送出田中中隊から基幹学校、そして嚮訓と一緒の道を進んだ仲だった。

互いに生きるために精一杯だったとは言うものの、今にして思えば言い訳に過ぎん。同郷の拓友の最期も知らず悔やまれた。一人ぼっちでどんな思いで世を去ったことだろう。悔やんでも余りある出来事だった。

三宅君と二人で無数に林立する墓標を次々と探し歩いた。どれくらい時間をかけたか、墓標一本一本に書かれた名前を読んでは進み、ついに墓所を探し当てた。心のどこかで「死んだのは嘘だ。生きているから見つからないんだ」とも思ったが現実そこに墓標が立っている。彼の死が現実になり悲しみが層深くなつた。

二人で義務感みたいなものを感じて、掘り返して遺髪を故郷へ届けようと相談がまとも掘り始めた。ほかの拓友が「遺髪は本部で確保し、先生方が肉親の元へ届けることになって」と教えてくれた。遺体を傷つけることなく、元通りに葬り合掌し最期の別れをした。

いざ内地へ引揚げと収容所に集合し、引揚者名簿が発表されたが除外されていた。

ハルビン市及びその近郊に住む日本人遺送の手伝いが下命された。またしても無情の帰国延期、三宅君が故郷への連絡を依頼してハルビン駅で別れた。帰国延期組は市内に戻り、日本人会に所属し、道裡の花園収容所を拠点にして、一カ月余り連日馬車に分乗し各収容所へ走った。婦女子と老人ばかりで、中には病人も多くいて、生きてるのが不思議なくらいの人も何人かいた。病人を背中で運んだり、小さな子供を抱えたり、荷物を運んだり、やはり我々の手伝いなしでは帰れない人たちだった。ほとんど全部送り出して、いよいよ自分たちにも引揚げの順番がきた。

引揚げを前に高熱が出た。四〇度を越えていた。苦しくて友を大声で呼んでも聞こえないらしい。大声のつもりが声になつていなかったようだ。苦しい体に鞭打つて友の方へと動いた。かなり広い廊下だが真っ直ぐに歩けない。左右の壁にぶつかりながら歩いて助けてもらつた。医者が来て注射をしてくれた。お陰で生命を取り止めた。

翌日、ハルビン駅発最後の引揚げ列車に乗るため駅に向かつて出発直前になつて、中共軍から「百人要員を出せ」と言つてきた。その百人は現地に残り中共軍に参加させるようだ。その名簿に載せられていた。結局無理と言う結論に至つたらしく除外された。

そして、駅に整列してからも引き抜きがあつた。中年の日本人が並んだ前を歩きながら指一本で指名していた。その背後には銃を構えた中共軍の兵隊が付いている。嚮訓同期の二人が拉致された。生きた心地がしなかつたが、何とか免れて引揚げ列車に乗つた。

日本人送還のため国府軍と中共軍が停戦中で、この列車の通過を待つて戦闘を再開することになつてい

と聞いた。

列車は新京近くの松花江岸で止まつた。鉄橋が爆破されて落ちてゐるらしい。船に分乗して渡河。列車を乗り継ぎ奉天駅に着いた。長い時間動かなかつた。いらだちはなかつた。ここは共産圏でないことで、皆が安堵してゐた。

錦州の難民收容所に入り、乗船の順番待ちで一カ月滞在、みんなの顔が明るくなつた。

敗戦以来一年余り、生命の危機が何回あつたことか。満人の暴徒に脅かされ、ソ連の兵士に物品を略奪され、人によつては凌辱まで受け、更には中共軍の脅威にと幾つ生命があつても足りないくらいだつた。

その上まん延する疫病に侵され、医者はおろか薬もままならず、食うものもなく寒さを凌ぐ衣服もなく、人間の生きるための限界を超越した環境下で耐えて耐えた末の笑顔だ。

「野球をやろう」とか「演芸会をやろう」という発案があつた。

ほとんどが野球のルールも知らず道具もない。ボー

ルはボロを丸めた物、バットは棒切れ。なまっただ体に活を入れるにはそれなりの効果はあったようだ。女性組はほうきをマイク代わりに歌をうたつて演芸会をやっていた。

持ち帰ることが許される金が千円と知らされた。手元に七千円ほどの金が残っていた。残っていたと言えば聞こえはいいが、何かの時のために蓄えておいた大事な金だった。

残しても紙くず同様と聞かされては使いきるのが上策と思い、収容所周辺に並んだ数多くの満人の屋台に足を運び食べ歩いた。

中には金を持たない友も何人かいて、連れ立って歩いているは無駄な買い食いをして、規定額を持ち帰った。

我々独身組はそんなふうに通費したが、妻帯者はそうもいかんらしい。日本へ帰ってからの生活費が一人千円では心配と、無銭者にいくらかの報酬を約束して、上陸まで預かってもらった人が大勢いたようだ。金と時間を無駄遣いした数日だった。

こうして消費した約一カ月、長かったようめで終わっ

て見れば長さは苦にならなかった。引揚船の順番がきた。この日を何度も何度も夢に見たものだ。

はしゃいだ気持ちでコロ島に向かった。

昭和二十一年十月十七日午後だった。

引揚船は客船ではなかった。アメリカ軍の上陸用舟艇だそうだ。LSTQ063と記号が書いてあった。

船首が大きく口を開けて、我々をのむ。これが唯一祖国への道だ。

船員さんの話では佐世保まで七十八時間かかるそうだ。三日間あまりだ。何するでもなく甲板でボンヤリ海をながめては時間を持て余していた。時折静かな海面に直径二・三メートルもある大きなクラゲがブカブカと寄ってくる。

船足を早めた船は、波穏やかな黄海を一路祖国に向かって進む。西の支那大陸も東の朝鮮半島も、視界にない大海原の気分を存分に味わった。船が玄界灘にさしかかったらしい。スクリュウの空回りする音が「ダッダッダッダッ」と聞こえる。

渡満のときは、一万屯の興安丸であったが、船酔い

するほど揺れた。それに比べ今回は小さな船なのでよく揺れる。甲板を波が洗う。甲板にいられなくなつて、船室で玄界灘通過を待つうち眠つてしまった。夜明け近くなつて、「日本が見えるぞッ」だれかが叫ぶ声で目を覚ました。飛び上がる。

遠くにかすかに島が、あるいは九州の一部か分からないまでも、それらしい姿が見えた。それから何時間も甲板にへばり付いた。ほとんどの者が甲板から船室に入ろうとしない。

次第にその姿がはっきりし佐世保港の入口近くだと知らされた。手を伸ばせば岬に手が届くほどに近い。松の緑と蕎麦の白い花が祖国の印象を深めた。検疫を済まして十月二十五日上陸。思わず祖国の土を力一杯に踏んだ。栈橋から岬伝いの長い道を歩いて、引揚援護局の施設に旅装を解く。衣服の支給を受け、風呂に入り大陸の垢あかを落とす。

引揚証明書、郷里までの乗車券なども交付された。すべての手続を終えて、二十七日午後南風崎駅発引揚げ列車に乗り故郷に向かった。

関門トンネルを通るころはもう夜だった。

帰国・再出発そして現在

翌日夜遅くに岐阜駅に降り立った。もうこの時間は最終列車が出た後でどうにもならん。

垢あかに汚れた体ではとても故郷に錦とは言えず、みじめな格好を村の人にさらすのがつらく思え、一日市内で時間をつぶして、暗くなつてから村に入る計画を立てた。県が準備した駅前の宿舎に入り、給食をいただき長旅最後の夢路につく。昨夜立てた計画はどこへやら、夜明けに駅に向かって突っ走っていた。

一刻も早く肉親に元気な姿を見せたかったのだろう。あるいは肉親が見えないさずなで呼んでいたのかもしれない。高山本線を列車が下る。満州の広軌に慣れた体にはひどく狭さを感じた。歓呼の声に送られ、故郷を離れて九百八十日、列車は刻一刻と郷里に近づいていく。

昭和二十一年十月二十九日、高山本線古井駅のホームに降り立った。

父母をはじめ全員が健在で、帰国を祝福してくれた。

しばらくは体調の回復に努めた。

岐阜県営製塩所（蒲郡市、河村信義所長）に期間勤務したり、地元農業会に勤めたりと紆余曲折はあったが、縁あって愛知県尾西市の養母と養子縁組が整い、妻世津子と結婚。二男一女に恵まれ市内の染色工場におよそ三十八年勤めた。

定年退職を機に四国・西国と観音霊場を遍路し、異郷に眠る拓友の冥福を祈った。

平成二年岐阜県関市に転居し、孫を含めた二男夫婦と同居している。孫七人にも恵まれ老境に入りながら夫婦ともになんとか健在、年金の助けを受けて生活を続けている。

【執筆者の横顔】

則竹次郎氏は岐阜県加茂郡和知村の農家の次男として昭和四年生まれの六十六歳である。少年時から夢のごとく大陸志向型だったらしく、昭和十九年和知国民学校高等科を卒業して直ちに満蒙開拓青少年義勇軍に入隊、岐阜第四十四中隊に所属し、同年四月には人物

が認められて基幹つまり義勇軍の幹部養成の学校に選抜され加藤完治氏直接指導を受け、満州国立大学開拓指導員訓練所が改められて嚮導訓練所となったが、そこで訓育をうけた則竹氏は果報ものであった。前途に大任を果たせるものと見なされたに違いない。

しかるに何ぞ図らん嚮導訓練所訓育半ばに日本敗戦に遭って志半ばで訓練は中止となった。

それ以後は隊としての組織は無くなり、ソ連軍、中国軍、八路軍の言いなりにならざるを得ない破目となつて生きるための苦痛と苦闘の連続である。できるだけ何人かは隊伍を組んで万一の場合は友人は殺され我一人逃げてゆく態度はとらない。死ぬ場合は皆一緒に死ぬ。生きるときは皆で生きるを誓いながら則竹次郎氏は良き友をもつた。

避難民を救助したり、指導しながら一日も早く祖国に引き揚げられるように喜憂を抱きながらの生活である。

則竹氏らはハルビン出発以来新京、奉天（瀋陽）、コロ島へと避難中、絶無にひとしく携帯品など無いの

になお掠め盗られ、ソ連軍から日本婦人が眼前で犯されているのに手も足も出すことのできない敗戦国民のみじめさを、二度とあつてはならないと涙を流した則竹次郎氏の真髓を永遠に語り継ぐべきであろう。

(社引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

生きる

岐阜県 後 藤 英 子

幼年時代

私の父は満鉄に勤めていました。発展途上にあつた満州は、学校も、病院も、地方事務所(市役所)なども皆満鉄が経営していました。父は、地方事務でした。いろいろな施設を作つては次々と転動しましたので、私たちもついて回り、今では満州中が懐かしい思い出の地となっています。

私は、大正八年一月二日に公主嶺で生まれました。

兄妹八人いますが、他の兄妹は皆父の転勤先で生まれ、同じ所で生まれたのは兄と私の二人きりです。杜宅は黒っぽいレンガのロシヤふう建ての家で、家のまん中に大きなベチカがありました。毎朝冬は、燃えガラを出し、薪をくべ石炭を上手に乗せる。上の広くなつた石炭バケツに二杯くらい、上手に次々とくべる。真つ赤に燃えた所に、下の灰をかぶせベチカの火が通る途中にあるかねの板を少しガスが抜ける程度に閉めるのがコツです。閉めてしまうとガス中毒を起こすし、開けておくとすぐ冷えてしまうので、日本から来たばかりの方は覚えるまで苦労していましたが、上手になると、マイナス三〇度を超す真冬でも部屋中、春のようにポカポカです。おこたとか火鉢は引き揚げて来てから物珍しく使いましたし、日本の冬の家の中の寒いには閉口しました。何しろ父の転勤が多かつたことでも楽しい思い出がたくさん残っています。兄弟姉妹は八人いましたが、満人のお手伝いさんの女の人と若いボーイさんが、お掃除やお洗濯を手伝ってくれましたので、母は大助かりでした。八人の子供たちの服も